
PEACE MAKER'S

フリスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P E A C E M A K E R ' S

【Nコード】

N 3 4 9 9 W

【作者名】

フリスタ

【あらすじ】

魔王の支持率が低下した！ それは勇者が魔物を殺しているからだ。魔王は支持率を戻そうとするが、最凶の勇者に殺されてしまう。魔物達の運命は？ 勇者はこれでいいのか？ 新しい魔王様はどうする？

勇者は良い人ではないようです。(前書き)

2011/9/4

書き方を戻しました。

勇者は良い人ではないようです。

「き、貴様……！！ この私に嘘偽りを……！！」

「ああ？ 何か問題でもあったのか？ あつても知らねーけどな」

漆黒のローブを着た初老の男は石畳に膝を着く。漆黒のローブの一部が微かに滲んで見える。それは初老の男の紫色の血であった。ローブは少し切り裂かれており、その部位に男は手を当てている。

「どっちにしろアンタじゃそーゆー器じゃねーだろ？ さつさと死んでくれよ。アンタを殺せば俺は国で好き放題できるんだからな」

対峙しているのは青年だ。軽装な鎧に、額だけを保護している兜。剣は見事という外ないまでの聖剣だ。その剣は間違いなく伝説の剣。魔王を倒すために作られた剣であった。

図式から言つて、これはラストバトル。一つの物語の帰結を迎えていた。

—— 1時間ほど前。

勇者アークバインは魔王の城へとたどり着いた。剣に付いた魔物の血を魔物の死体の皮膚で拭い取る。

「よえーんだから突つかかってくるんじゃないよ。面倒くせえ」

「貴様……！ 勇者アークバイン！」

『待て、その者を連れてまいれ』

「あ？ 誰の声だ？ ジジイみてーだけど？」

「無礼な！！ 我らが9代目魔王陛下を何と心得る！！」

『よい。連れてまいれ』

アークバインは目の前のヴァンパイアの男に顎で連れていくように煽った。ヴァンパイアは、苛立ちながらも一言「着いてこい」とだけ伝え、歩き始めた。魔王の城だというのに、魔物の気配がほとんどなかった。このヴァンパイアが先導しているからというのも多少の要因ではあるが、また別の理由もあった。

「来たか……下がれ」

「し、しかし……畏まりました」

ドアが閉められると、そこには魔王と呼ばれ、人間に恐れられ、魔物の頂点に立つ男の姿がそこにあった。

「私が、第9代魔王のジャハムだ」

「何でも良い。お前が死ねば俺の旅も終わる。さあ、死ね」

「待て。全く、先代の勇者とは違うのだな……。アークバインよ手を組まぬか？」

「はあ？ 何で俺が魔王なんかと手を組まないといけねーんだよ？
行くぞ？」

「ちよっ！ 待てと言うところうに！！ ……わ、分かった。すまない。話を聞いてくれ」

「何で魔王の話を聞かないといけねーんだよ？ さあ、お前の罪を数えろ」

「すみませんでした！！ お話だけでも聞いて頂けないでしょうか！？」

遂には土下座までした魔王の無防備さに、アークバインはため息をついた。

「まさか、最後の親玉が——」

魔王は心の奥底でホッとした。これで話を聞いてくれると……。しかし、この勇者。最低最悪の勇者である。

「——こんなに楽に首を差し出すとはな！！」

アークバインは魔王の土下座されている首に目掛けて剣を振り下ろした。

「ひ、人の話を聞かんのか！？」

寸でのところで魔王は何とか避けた。心臓の鼓動は恐怖のそれを表している。

「お前は人じゃなくて魔王だろうが……避けるんじゃないよ！」

数分後。逃げ続ける魔王に呆れたアークバインは遂に話を聞くことにした。

「最初からそうしてくださいー！」

魔王の精神は磨り減り、人格崩壊の限界を間近に迎えていた。

「あー悪かった悪かった……で？ 何なんだよ？」

「じ、実は勇者が貴方様に代わってからというもの、私の支持率が激減したのです。先代の勇者、カシエル殿との協定により、我々魔族は人間との共存は難しくとも、不可侵条約を守ってきたのです。その頃、私は魔王様の参謀役として話し合いに応じておりました。しかし、それが現在のアルビオン王国の国王に代わってから不可侵条約が破られました。人間が我々を攻めてきたのです」

「はあ……それで？」

「我々もただ殺されるわけには行きません魔権侵害です。自衛権を行使し我々は戦いました。そこに派遣されたのが、現在の勇者である貴方様。アークバイン様なのです」

「あーまああのジジイからは魔王を倒せと言われてるだけだけどな

「そんな貴方が強すぎるのです！ 数々の幹部が殺され、再起不能となり、魔物の私への支持率は過去最低の2%！！ 歴代の魔王様方のどなた様もこれ程酷い数値を出したことはありません！！」

そう、これこそがこの魔王の城である本丸に魔物の数が少ない理由である。自分たちを守ってくれない魔王の姿に、ほとんどの魔物は魔界へと帰ってしまったのだ。

「魔物つて『悪』だろ？ 最低つて誉め言葉じゃねーの？」

「私たちは『悪』ではありません！！ 人間にも悪い人はいるでしょう！？（あんとか！！）」

「なんか言ったか？（チャキツ）」

「何も言っておりません！！ 続けます。そこで私からのお願いです勇者様！！ 不可侵条約の再提携をお願いしたいのです！！」

「知らねーよ。ったく聞いて損したぜ。遺言も残せたしもういいだろ？ じゃあ心おきなく死ね」

「遺言ではありません！！」

「だあああ！ うるせーな！！ あー……（おっ！ いいこと思いついたぞ……ニヤリ） 分かった分かった。俺から国王のジジイに魔物の土地への進軍を止めさせればいいんだろ？」

「お、おおおおお！！ お願いできますか勇者様！！」

「あー、とりあえず泣くんじゃねーよみつともねえ……俺たちはこれからの人間と魔物の未来を作る立役者じゃねーか。仲良くしようぜ。な？」

「ゆ、勇者様ー！！」

「さて、魔物のほとんどは魔界に帰っちまってるんだろ？」

「はい。ここよりも劣悪な環境なのですが、殺されるよりはマシだと、私を支持する者はほとんど去って行きました」

「じゃあよ。世界を半分にしちまえばいいんだろ？ 半分は人間。もう半分は魔物。こうすりゃ魔物はこっちの世界に帰ってきて、アンタの支持率も回復するだろうし、俺たちも無駄な争いはしなくて済むだろ」

「ほ、本当に世界の半分が！？」

「もちろん。世界の半分はアンタのモノだ。魔王様」

魔王はその言葉に涙した。支持率が戻る。またみんなから『魔王様』と信頼を込めて呼ばれる日が来ると夢見て、そして、涙を勇者に見せるのが恥ずかしく、窓に向い歩く魔王。それにアークバインは着いていき、魔王の肩に手を置いた。

「泣くなよ魔王。これからじゃねーか」

「ゆ、勇者様……ありがとう。本当にありがとう……」

アークバインは魔王の肩に置く左手に一気に力を込めて、魔王を石壁にめり込ませた。一瞬何が起こったかわからない魔王は痛みを覚えるのに数秒かかる。その痛みを覚えた時には、左肩から斬り伏せられていた。

「ぐ、グアアアアアッ！！？」

「やゝつと無防備になったな。手間取らせやがって、その傷じゃあ逃げる力も湧いてこねーだろ？ さあ心おきなく死ね」

「き、貴様……！！ この私に嘘偽りを……！！」

「ああ？ 何か問題でもあったのか？ あつても知らねーけどな」

魔王の漆黒のローブは微かに滲んで見える。それは魔王の紫色の血であった。

「どっちにしろアンタじゃそーゆー器じゃねーだろ？ さつさと死んでくれよ。アンタを殺せば俺は国で好き放題できるんだからな」

「ぐううつ！ ハアハア……好き放題だと……？」

「ああ、女に酒にと、今後の生活は遊んで暮らせるんだ。だから俺の幸せのためにお前ら魔族は邪魔なんだよ。死ね！！」

「ギヤアアアアアアツ！！」

「魔王様！！ 魔王様……！！」

「さっきの吸血鬼か……お前も邪魔になりそうだな……死んどけや」

その日、魔王軍は全滅……したかに見えた。

勇者は良い人ではないようです。（後書き）

勇者：アークバイン。

性格：女と酒が好き。欲望に忠実な感じな勇者。

容姿：イケメン度 B+

一言：「ババアとブスは死ね」

魔王：ジャハム……死亡

性格：割と温厚。先代の勇者との協定により、人間は襲わない。

容姿：ジジイ

一言：「ほ、本当に世界の半分が！？」

最強の悪魔の様な勇者アークバインを前に威厳が無くなり、支持率は大幅下落。勇者の口車に乗り、世界の半分を得て支持率回復を狙ったが、騙し討ちに合い死亡。

感想・アイディア随時募集中です。

読みにくい。誤字・脱字の報告も常に募集！

他執筆中作品と違い、行や段落の使い方を変えているので不安です。

作者は弱い生き物です。優しく接してあげましょう。

新魔王の噂が立ち始めたようです。(前書き)

さあ！ 新魔王を決める選挙が始まるぞらー！！

いつ始まるかはまだ不明。

新魔王の噂が立ち始めたようです。

魔界。人間は住む事叶わぬ瘴気の世界。いや、住めなくはない。例えばエルフの里のように自然豊かな魔界とも思えない地域も存在する。ただ、魔界で一生を遂げるに耐えられる者は少ないだろう。

魔物たちは種族ごとに地域に分かれ暮らしていた。エルフは森に、オークは草原に、ドラゴンは山にと、それぞれの生態系に基づいての生活をしている。中には悪魔族がエルフの里と一緒に生活している者もいる。

特にエルフは排他的な種族のため珍しくはあるが、現在のエルフの族長の『クリスタル』という美しい女性のエルフが協和的な人物だからである。中には快く思わないエルフもいるが、クリスタルの存在は、他種族への嫌悪感を抑え込むほどであった。

他にもドラゴン族に強さで認められれば、一緒にスライムが住むことだってある。……これに関しては100年に1度あるかないかのレベルの話だが……。

——ここはエルフの里。

「お嬢様ー。どちらに行つたのですかー？ お嬢様ー？」

「お、マエダじゃないか。またエミリア嬢ちゃんを探しているのか

？」

執事服の青年が、羊の角を生やした青い肌の魔物に呼び止められる。角が無く、肌の色が人間であれば、人間だと言える容姿をしている魔物だ。呼び止められた執事服の青年は人間だ。魔界に住む数少ない人間の一人である彼の名は『前田 政宗』。彼を知っている者は彼を『マエダ』と呼んでいる。

「これは八百屋の御主人殿。ウチのお嬢様を見かけませんでしたか？」

「ん」。俺はさっき店に出たばかりだからな。おい、お前は見たか？」

「エミリアちゃん？ さっき森に向って行ったよ。モフってきますって言ってたけど……なんだろうね？」

八百屋の奥さんである紫色の肌の女性に情報提供の御礼を述べて、マエダは森へと向かった。

——ところ変わって、街の外れにある研究施設。ここに二人の男性型のエルフがいた。一方のエルフが、赤い光が消えた小瓶を一つ取りあげた。

「おい、不味いぞこれ。見間違いないよな……お前も確認してくれよ」

「何だよ？ ジャハムの精霊瓶じゃねーか。そんなもん持って何を

……っ！」

精霊瓶とは、魔族は生まれながらにして生涯契約の精霊と一緒に血を一滴だけ小瓶に入れる。これで、その魔物がどこにいるのか。生きているのかを判別するのだ。簡単な見分け方として、精霊が青い光を放っているなら生きている。その色が赤に近づくに連れて成長や老化を表し、何も入っていない空っぽの状態は、精霊自体の死を表し、精霊が死ぬと魔物も死んだということになる。これに間違いという事はない。

「死んでるよな……？　こ、こりゃあ……この場合は……」

「ああ！　忙しくなるぞ！！　魔族の総裁選だ！！　新しい魔王様を決める総裁選が始まるぞ！！」

総裁選。つまりは魔王を選ぶための選挙だ。通常であれば、前任の魔王。この場合、ジャハムになるが、この前任の魔王が次の魔王を指名する。しかし、ジャハムは死んだと精霊が表している。

ここで、自薦他薦の投票式の選挙が行われる事になる。自薦他薦ともに最低条件となるのは魔力である。ここで勘違いしないでほしいのは、別に最強でなくても問題はないと言うことだ。多いに越したことはないが、その場合、その殆どが老い先短い高齢の魔族であることが多いからだ。ある程度の成長見込み等も加味して構わないのだ。かと言って、若過ぎてしまっても問題だ。これは単純に、馬鹿であっては困るからだ。ちゃんと魔物を引っ張って行ってくれる者を選ぶ必要がある。例外は当然あったりする。補佐する者がしつかりしていれば問題はないのだ。しかし馬鹿の補佐をやりたがる者も貴重であるのが現状だ。

「ジャハムの最後は最低支持率だったからな……誰が魔王になってもある程度人気は得られるだろうけど……」

「ん……そーさな……。イースト地区のルフィ・ザ・モンキーはどうだ？」

「あいつ強いけど馬鹿だろ？ 補佐が大変だよ……泳げねーのに海に憧れるアホだぜ？ 一部にはウケは良いけどな……海賊団作るとか言ってたしな……うん、駄目だろ」

「じゃあ……北の皇女様は？」

「性格からして立候補しないだろうし、他薦しようものなら殺されるだろ」

「じゃあ、デトロイトのクラウザーは？」

「独裁（DOKUSAI）されるぞ？ 現時点で有力候補はエルフの『クリスタル様』じゃないか？ 未亡人の状態だが……あの美貌に魔力。それに人間との共存だって望んでるし、執事として人間を雇ってるんだろ？」

「ああ、奴隷扱いじゃなくて、お嬢様の『エミリア様』の世話を任せてるんだろ？ すげー信頼だよな……まあ身内贔屓みたいだけど、俺達エルフのトップが魔王様って言うのも悪い気はしねーよな」

「ま、とりあえず今は分からないからな。各地に報告を飛ばして、投票の準備を進めようぜ」

勝手に話は『次の魔王様』で密かに盛り上がっていた。

ある一定の魔力値・知能を常に維持している魔物の派閥がある。それがダークエルフである。知能が非常に高いダークエルフは魔王には向いていると言えるだろう。そんなダークエルフたちの現在のトップは、年齢・魔力値・知能。どれをとっても申し分ない『ブラスト』と言う美しい女性のダークエルフだった。

「そうか、ジャハムが死んだか……まあ、いつかは……と思っていたがな」

「はい。良い時期かと思われませんが？ 出馬されますか？」

「当然じゃ。すぐに出馬表明を出すぞ」

「畏まりました」

「のっ……」

「はい？」

「クリスタルは出てくるじやろうか？」

「恐らくは。ジャハム様の事も支持していた方でしたから出てくるかと思われます。今回の総選挙で一番の強敵ですね」

「そうか……出てくるか」

ブラストは不敵に笑みを浮かべていた。

——森の奥の黒オオカミの集会所。

「そっかー君もモフモフなのかー……おお……これは……中々良いモノをお持ちで……ん？ 君はさっきモフったよ。はいはい並んで。と、見せかけて次は君だー！！ モフモフ」

「お嬢様。どちらですか？」

聞き慣れた声を尖った耳で聞き取り、少女はオオカミ達をモフるのを止めた。

「マエダだ！ みんな逃げるんだ！！」

幼い女の子の声を合図に一気に散っていく黒オオカミ達。幼い女の子は少し横に尖がった耳をして色白で銀色の長い髪に深紅の瞳をした少女。エルフだ。不思議なのは母親も、数年前に亡くなってしまった父親もエルフなのだが、髪の色と眼の色を引き継いでいない点だ。母親は水色の髪で青い瞳。父親は金色の髪で緑色の瞳をしていた。どちらのモノでもない髪と瞳。しかし、誰も気に止めることはなかった。何故ならこの少女はクリスタルの娘であり、とても愛されているのが見て取れるほどに可愛がられているからだ。

「マエダー！ とりゃー！」

エルフの少女は執事の胸に飛び込むようにダイブし、執事はそれをダメージを受けながら受け止めた。

「ぐっ……。こ、こちらにいらっしやいましたか……。こほっこほっ」

「どーしたの？ 何で来たの？ 寂しかったのか？」

「いえ、寂しいというより、危ういとも言いましょつか……。何度かオオカミに食べられそうになりました」

「マエダは逃げ足だけは速いからな。お母さんより早いんでしょ？」

「どうでしょうか？ そうかも知れませんが……。って、そんなことよりお嬢様。そろそろお戻りになりませんか。クリスタル様が戻ってまいりますので……」

「おかーさんが？ ……よしマエダ！ とりゃあっ！ 肩車で全速カー！！」

「うわっ。ふう、分かりました。行きますよ」

エミリアは前田の背中に回り、頭を軽く叩いた。前田もそれをつもの事と受け止め、スタートの声をかけて、3割弱の速さで駆け出した。エミリアがいるおかげで前田は黒オオカミに襲われずに帰って行った。

「ひゃー！ 早い早ーい！ 突撃！ 突撃！ 突撃！！！！」

——クリスタルの家。

「そうですか……わざわざありがとうございます」

「いえ！ クリスタル様が立ち上がって頂ければ、支持率は約束されるようなものです。旦那様とジャハム様のためにもどうか……」

「いえ、まだ立候補するとは決めていませんので……」

「これは失礼いたしました。ですが期待は隠せません。……では、まだ報告しなければいけない地域がありますので、お時間を取らせてしまい申し訳ありませんでした」

クリスタルはジャハムが死んだことに対し、正直 困惑していた。ジャハムを支持していた数少ない人物だったからである。指示していた理由は簡単である。病により亡くなった夫でもある第8代目の魔王ローゼンクロイツ。ジャハムはその当時の側近中の側近。参謀であったからに他ならない。ローゼンクロイツはクリスタルとの家庭を築き、魔王の座をジャハムに託した。

当然、夫であるローゼンクロイツを支え続けてきたクリスタルもジャハムと交流はあった。それ故に魔族をどうしていきたいか、そのジャハムの理想をクリスタルは知っていたのだ。彼女なりに考え、勇者の攻勢による支持率の低下ということは分かっていた。そんなジャハムをクリスタルが支持しないわけがない。

「あなた……私に出来るかしら……？」

「たっただいまー！！」

「あ、おかえりなさいエミリア」

「お嬢様、まずは手を洗ってうがいを……クリスタル様ただ今戻りました。遅れて申し訳ありません。すぐに夕飯の支度をいたします」

「ええ、手伝うわ」

「んう？ おかーさん何かあったの？ 元気なさそうだよ？」

「ううん。何もないわよ。今日はエミリアの大好きなテンデルアでも作りましょうか」

「うーやたあー！！ ウモルいっぱい入れてね！！」

「はいはい。じゃあ手洗いうがいしてこようか。出来るかな？」

「出来るよー任せてよ！ マエダは着いて来るがいい！！ 私を見守る重大な役目を与えてあげようじゃないか！！」

「ありがたき幸せでございます。今日こそは成功すると信じております。どうか、石けんで洗い流さぬ手で眼を擦らぬようにと祈っております。クリスタル様 テンデルアなら、昨日下ごしらえした物が保冷庫にありますので」

「流石ねー助かるわー」

執事の前田と娘のエミリアが洗面所に向かうのを笑顔で見送って、クリスタルはまた考え始めた。自分に、立候補して仮に魔王になったとして、みんなを助ける力はあるだろうか……と。

クリスタルは下ごしらえされていた食材を軽く水で流し、鍋に入

れ火にかけた。

「ジャハムさんは間違いなく殺された……。相手は恐らく人間の勇者ね。だって伝説の剣じゃないと消滅までさせられないものね……。会って話を聞く必要があるわね……」

「おかーさん出来たー!?!」

「お嬢様。流石に無理でございます。それから、まだうがいをしておりません」

「そうねー。もう少し待ってねー。うがいしてきてねー」

食卓には温かい光景のみで、クリスタルは魔王の話などは一切触れぬように徹した。

新魔王の噂が立ち始めたようです。（後書き）

8代目魔王 〃 クリスタルの夫 〃 クリスタルは未亡人
死んでしまう人・死んでしまってる人の名前は大体がテキトーです。

前田でピンと来た人は挙手！！ 手あげてくれた人はフリスタ感激
！！
しーかーしー。あの前田とはパラレルなので、あんなチートではない。
い。

これ、何小説？ って思った方へ……知らんよ。
強いて言うなら……選挙と政治と共存的な？ そんな感じです。

感想・アイディアは随時受付中です。

こーいった魔物とか出して欲しいとかでも構わないっす。

でもバトルに走らないかと思うので、そこだけ御留意ください。

では、待つてまーす。

魔王候補が集まり始めたようです。(前書き)

なんか、やっぱり新作に力が入っちゃうよね。
他の作品も更新せにやなんのにwww

魔王候補が集まり始めたようです。

「それじゃあ前田くん。お願いね」

「畏まりました」

「んうゝ……おかーさん……どこか行くのゝ……」

早朝。クリスタルが家を出ようとする。クリスタルの娘のエミリアは、まだ寝ぼけ眼で欠伸を混ぜ合わせながらクリスタルに質問する。

「うん。これから私、王達の会議に出なきゃいけないから今日は遅くまで戻れないのよ。だから　ちゃゝんと前田くんの言うこと聞いて先に寝ててねエミリア」

「分かったゝ……マエダはしっかりエミリアが見ておくよ……」

「恐縮でございますお嬢様」

この執事の青年は魔族などではなく人間だ。本来、魔族、ましてや排他的な種族であるエルフなどに近付ける存在ではない。だが、クリスタルの優しさで前田は執事として雇われている。と、周囲からは思われているかもしれない。半分は当たっている。しかし、それが全てではなく、前田は呪いをかけられている。このエルフのトップとも言えるクリスタルによって。それは――

――『絶対命令の呪い』という隷属的ともいえる強力な呪いだ。

数年前。クリスタルの夫であるローゼンクロイツは病に倒れた。愛する妻とまだ立つことも喋る事も出来ない娘を残してこの世を去った。もしかすると魔王の座をジャハムに譲渡したのも、自分の病が分かっていたからなのかもしれない。

クリスタルは幼いエミリアを家に残して、雨の中 傘をさしてどこ行く宛てもなく歩いた。ローゼンクロイツが死んでも涙は一切流さなかった。周囲から気丈だと、辛いだろうと言われても何も感じられなかった。ローゼンクロイツが死んで数日が経つが、目下にはクマは次第に酷くなっていく。しかしクリスタル自身は眠いとも感じられない状態だった。このままでは倒れてしまう事は明白だったが、強制的に眠らせることも叶わない。何故なら今のエルフの里に彼女より強力な術者などいないのだから。仮に、自分より高位の者に術式を施すにはそれなりの魔法具も必要になる。しかし、そんなモノも現在この里にはなかった。

「どうして……あなた……どうして言ってくれなかったの？」

病の事など何も話されなかった。彼女の中にあるのは、『これらの事』ではなく『今の事』でもなく、ただただ『何故?』という事だけだった。それに答える者もおらず、自問自答を繰り返す。いや、自答なんてない。問いかけるだけで、答えなどないのだ。

そこにやって来た……と言うよりも、人間界とのゲートに瀕死の状態で倒れていたのが前田である。魔界から人間界に行くのはさほど難しくはない。しかし逆に、人間界から魔界に来るには特殊な道具などが必要になってくる。しかし、それを人間界で揃えるには非

常に難しいため、普通は来られるはずがないのだ。

それはさておき、そんな瀕死の前田を最初に発見したのが、生気のないクリスタルだった。夫であったローゼンクロイツの共存という考えに触れ、クリスタルもまた人間を信じようと、目の前の倒れている人間を助けようと思った。しかし、男は息も絶え絶え、生きるのを諦めようとしていたところだった。

「ヒュウ……ヒュウ……けほっ」

微かな息に、咳き込めば嘔き出す吐血。

「まだ……まだ助かる……！」

必死だった。クリスタルは軽い回復魔法を当て、すぐさま呪いをかけた。その絶対命令の呪いで『死ぬな、生きる』と命じる。生きるのを強制的に諦めさせない呪い。それは血を止めるために施された回復魔法。傷自体は全く治っていない状態。それはそれは男を苦しめた。

「亜阿あ啞ア？あ亜あアア……ッ……！」

死にたくない！ 痛い！ と、瀕死の男は重傷の怪我に悲鳴を上げ始める。クリスタルはそんな声にハツとし、似ても似つかない青年にローゼンクロイツを重ねた。

（もし、あの人が、こんな風に痛みに耐えていたなら……私は、そんなあの人の姿を見て耐えられただろうか？）

クリスタルの眼からは涙があふれ出していた。強力な回復魔法の

光を男に当てながら、もうこの世に存在しないはずのローゼンクロイツの、心配させまいとする最後の優しさに触れ、大粒の涙をいくつも零した。

ローゼンクロイツが病で苦しんでいたかと聞かれれば、分からないといしか言えない。苦しまずに死んだかもしれないし、愛する妻を心配させまいと、表では常に笑顔で、心の中では病と常に戦っていたのかもしれない。ただ、どちらにせよ、架空とはいえローゼンクロイツの姿がクリスタルに涙を与えた。

その後、回復魔法をかけ続けられた男は一命を取り留めた。眠ってしまった男の心臓の鼓動の音に耳を当て、クリスタルは再び涙を流した。

「よかった……生きてる……生きてる……」

クリスタルは安心して、これまでに溜め込んできた来た疲れを開放し、深い眠りに付いた。

クリスタルが眠りから覚めると、男はもう歩きまわっていた。近くに生っていた果物などを取り、クリスタルの下に集めてきていたのだ。

「命を助けていただき感謝の言葉もうまく言い表せません。どうかお傍に置いて頂けないでしょうか我が主。この命、貴方様に捧げます」

呪いの効果でクリスタルを主と仰ぐ青年は執事服を身に纏っていた。ちなみにこの『絶対命令の呪い』というのは、掛けた本人も解く事は出来ない。呪いの効果を常に成就させて行くほかないのだ。

呪術者であるクリスタルが死んだ時、呪いの呪縛から完全に解かれるのだ。

「その服は？」

「はい、私は執事でございます。予備のものがございましたので着替えさせていただきました。……確認を前に失礼いたしました。服は着用を禁止されますか？」

「着てください！！……うん、よく似合ってるわ。私の名前はクリスタル」

「お名前をありがとうございます我が主。私の名前は前田政宗と申します」

「クリスタルって呼んで前田くん」

「……は、畏まりました。クリスタル様」

「うーん……まあ皆もそう呼ぶから良いか」

こうして、前田はクリスタルの家の執事になった。

もちろん、クリスタルは余程の事がない限り絶対命令は使わない。契約で縛るということはしない女性だった。

「エミリア。行ってくるわね」

「……くう……くう……んみゅう」

「ふふっ行ってくるわね。じゃあ前田くんお願いね」

「畏まりました」

王達の会議。壁を越えて、エルフの横にオークが、オークの横にスライムが、スライムの横にドラゴンがと、席を並べて円卓に集まる。

「ふむ、ラーズ。お主がいるとは珍しいのではないか？」

ダークエルフのブラストは対面に座る『ラーズ』という女性に気軽に声をかける。

薄緑色の美しい長い髪をポニーテール状に結って座るラーズの左頬には紅いラインの化粧が施されている。ラーズはドラゴン族の最強種。『龍人』である。ドラゴンとは1匹1匹が巨大で、火を噴き、空を飛びイメージを持つ者が多い。もちろんその認識は間違いなく正しい。ただ、その中でも最強種は人の姿をしていながらもドラゴンの数倍の力を秘めている。

ラーズはブラストの声に閉じていた瞼をゆっくりと開く。それが睡眠だったのか、瞑想だったのかは分からない。その端正でキリッとした顔は誰もが憧れてしまう様な刀のような美しさがあった。しかし、そんな頬も目も緩ませ、その性格を表すかのように返事をした。

「あ、久しぶりーブラちゃん」

そう、黙っていれば最強種の名に相応しそうに見えるのだが、喋らせるとどうにも締まらないのだ。しかし、実力は間違いなく最強種。この場にいる誰もがラースに勝つ事は難しいだろう。そんな最強種のラースは立ち上がって卓を飛び越えてブラストに抱きついた。

「その呼び方は止めよと言ったじゃろうが……」

ブラストは抱きついて来るラースを鬱陶しそうに引き剥がそうとしているが、本気で引き剥がそうとはしていない。そんな仲良しの二人を見て、力のラース。知のブラスト。そんな風に評価する者もいる。

因みに、ラースもブラストも会議があっても基本的には出席する事はない。彼女達にとって意味がないからだ。しかし、ラースにとってもブラストにとっても今回は十分に意味があった。それはもちろん新しい魔王を決めるための事前会議だからだ。

「……って、おらぬではないか!!」

「ブラスト様大きな声出さないでくださいよ。誰の事ですか?」

人型スライムの議長である『ゼリー』は間延びした声でブラストを戒める。このゼリーさん。最弱種として有名なのだが、何故か誰も逆らう事が出来ないで議長の座を任されている変わり者である。最強種であるラースとはよく遊ぶ仲らしい。

「クリスタルの事じゃ! 出馬するんじゃない?」

「いえ、打診はしたんですけど、考え中だそうでした。旦那さんを亡くしてまだ数年ですからね。出ると言う答えは貰ってませんよ」

「そ、そんな馬鹿な……」

「あーあーブラちゃん泣いちゃった」

「泣いておらぬわ!!」

「遅れてすみません」

そこにやって来たのがエルフのクリスタルだ。

「遅い!!」

「えっあ、ごめんなさい？」

「久しぶりークリスタルちゃん」

「ラースさん。お久しぶりです」

「出るのじゃな!? 今度こそ妾の方が上だってこと証明せねばならぬのじゃ!! 出ると言えクリスタル!!」

「いえ、まだ時間はありますから……」

「出ないつもりか!？」

「はいはい。抑えてくださいね。じゃあ、珍しく全員集まったみ

たいなので第32回王達の会議を始めます。議長は相変わらずスライムのゼリーです。質問がある人は挙手してくださいね。では今回の議題はこちら」

ゼリーには割と軽快に話し始めると、小人型スライムの3匹が出てフリップを出し始める。

「今回は新しい魔王様を決めるための、選挙を行う前の事前申請。及び、……及びなんでしたっけ？ ああ、そうそう、私達魔物の今後の方向性をお話頂こうかと思えます。現在の立候補者はダークエルフ代表者のブラスト様」

「うむ、妾が魔王になった暁には――」

「はい、まだです。後でお願いします。そして、ドラゴン族代表のラース様」

「様付けしなくて良いのに」

ラースとゼリーはピースサインを交わしながらのほほんとしている。

「仕事ですから仕方ないので。最後に、悪魔族のカミル様」

「カミル君？ ジャハム様の子供のカミル君!？」

「はい……お久しぶりです。クリスタルさん」

悪魔のカミル。父は支持率最低を叩き出した9代目魔王のジャハム。それ故に様々な迫害を受けたらしい噂があった。クリスタルは

それを心配してはいたが、ローゼンクロイツも死んだ今、中々別の種族の土地へ赴く事は出来なかった。

紫色の肌に見事と言える悪魔の双角。瞳は吸い込まれてしまいそうな漆黒の色をしている。首から下はマントで覆われているため、迫害の程は窺えない状態だ。

「はいはい静粛に」。というわけで、現状の候補者は3名です。立候補の期限は5日後までとなっております。奮って御出馬ください。では現在の立候補者の方々の御意志を発表して頂こうと思います。」

「妾からかの？ ダークエルフ代表のブラストじゃ。妾が魔王になればこの知力を持って人間の世界の半分は手に入れてみせるぞ」

「はい、どうも。続いてラース様」

「ジジに言われて来ました！。何が出来るか分からないけど頑張ります」

ジジというのは先代の代表の事だ。ラース自身は魔王になる気はあまりなかったりする。先代の代表である自分のお爺さんに言われて来たという主体性の無さ。最強ではあるが魔王になるのは難しいというものだ。

「はい、どうも。最後にカミル様」

「僕の父の始末は僕が付けたいと思います。まずは、勇者の抹殺を目標とし、次に勇者の因子を潰していききたいと思います。世界は全て僕らのモノです」

「カミル君……」

クリスタルはカミルの変化が悲しかった。人間との共存。それが歪んでしまった。人間を駆逐すると、その存在を否定すると。

勇者の因子とは、魔界に言い伝えられているモノだ。勇者とはその不確定な何かを持って生まれてくる。その不確定なナニかが因子だ。種のようなモノとも例えられる。それが目覚めれば勇者になる。人によつては高位の魔法使いや、強靱な戦士、万能な賢者に留まる者もいるが、まったく覚醒しない者もいる。しかし、覚醒した者は魔族と何らかの関わりを持つ。

その因子を覚醒させた中でも、現在の勇者アークバインは魔族を滅ぼす存在だ。実際に新しい魔王を選ぶ事になっているのだから。ジャハムの支持率が下がったのはジャハムの責任だ。しかし支持率低下の引き金はアークバインが引いたのは確実だった。

「はい。ありがとございました。個人的には平和に暮らせるようになればそれでいいんですがね。人間が滅びれば確かに平和にはなりますがね……。ではでは今日のところは以上で解散になります。選挙規定により30日後に選挙となります。立候補していない方は残り5日ですからね。期限が迫ってますのでお急ぎください。では解散」

部屋に残るのはカミルとクリスタルだった。

「カミル君どうして……？ ジャハム様の跡は継がないの？」

「父さんはもう死にました。僕に様々な傷を残して死んだんです」

マントの上から身体を擦るようにカミルは言う。そのマントの下にはどれ程の傷があるかは分からない。魔王の支持率の低下は魔王の子ども同罪。そう言わんばかりに他の魔族はカミルを攻撃したのだろう。クリスタルはカミルに触れようとするが、カミルは再び口を開いた。

「共存なんて無理なんですよ。話を聞く奴だけを残して、他は殺した方がいい。人間なんていない方が平和なんだ。だから僕が勇者も、勇者の因子も全て……。これからアークバインを殺しに行きます」

「駄目よ！ カミル君それは駄目……。まずは話を聞いてみないと何も分からないじゃない。それに……。やっぱり危険だわ」

「クリスタルさん……。僕は……。僕は怖いんです。殺すと口で言っても、話し合いから始めようと思ってます。でも、問答無用で殺されるかもしれない。僕は悪魔だから目に付いただけで殺されるかもしれない……」

カミルは震えだす。それをクリスタルは痛々しく受け止めた。

「カミル君。私が行くわ……。私がまずアークバインさんの話を聞いて来るから。もう少しだけ待ってて」

「……うん」

カミルは震えながら涙を流し、頷いた。その表情は窺えない。

「クリスタル何をしておるのじゃ！ 久しぶりに会ったんじゃ、早くせぬか！」

「ブラちゃん寂しいんだよー。相手してあげてークリスタルちゃん」

「誰が寂しいなどと言った!？」

「ごめんなさい。急用が出来ちゃったから、明日うちに来てもらえる？ きつとエミリアも喜ぶから。手料理で申し訳ないけど、待ってるから」

いつまで経っても出てこないクリスタルのところへ、ブラストとラースが顔を出す。しかし、クリスタルはカミルの事が最優先と考え、二人へ謝罪した。

「クリスタルの手料理か……うむ。では明日行くからの！ 覚えておれ!!」

「私も行くねー。じゃあブラちゃん、今日はゼリーちゃんにご飯食べに行こうー」

「わ、妾は忙しいのじゃ！ 選挙に向けてじゃな——」

「はいはいー。一名様御案内ー」

去っていく魔王候補の二人。そして、部屋に残るもう一人の魔王候補。

「……よかったですか？」

「……うん。カミル君、辛そうだから……じゃあ明日カミル君もウチに来て。これから少しアークバインさんのところに話ししに行くから。その報告させてもらうからね」

そう言って、クリスタルは部屋を後にした。

カミルは一人きりになった部屋で、静かに笑みを浮かべた。それは、もし仮に人間視点で見たとするならば、悪魔の微笑みだった。

魔王候補が集まり始めたようです。（後書き）

えっと、【ヒダリキキ 様】

『常に人型スライム』の案ありがとうございました！。

最弱だけど誰も逆らえないゼリーちゃんでした。今後出てきまゝす。

血を吸わない吸血鬼は検討中です。

今後ともモンスター・人間のキャラクター案があると嬉しいです。

感想・アイディアは随時受付中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3499w/>

PEACE MAKER'S

2011年10月9日15時54分発行